

# 第80回 「変身」してブレイクした 1973年の歌姫たち

日本経済が第1次オイルショックに襲われたのは昭和48（1973）年10月のことでした。同じ年の春から夏にかけての時期は、まだあちこちで景気のいい話を耳にすることができたのですが、私自身は就職先がなかなか決まらず、悶々とした日々を送っていました。

その頃、不合格の憂さをひととき忘れさせてくれたのが、『11PM』や『23時ショー』などの深夜の男性向けワイドショー番組で、なかでもいちばんのお気に入りだったのが、TBSの『ぎんぎナイトナイト』でした。

生放送のスタジオは「GINZAテレサ」と命名され、夕方はせんだみつおが『ぎんぎNOW!』で十代の男女を夢中にさせ、『ナイトナイト』では桂小益（九代目桂文楽、二瓶正也らが日替わりで司会を担当していました）。

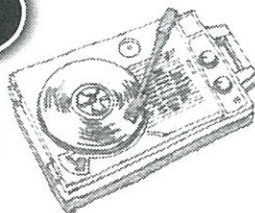
記憶に鮮明なのは、番組最後に「今月の歌」として毎晩流されていた歌が大ヒットしたと深く関係して

います。私の記憶では、同年5月頃から順に、金井克子『他人の関係』、夏木マリ『絹の靴下』、安西マリア『涙

## 名曲カルテ

# 昭和歌謡と いまでも

堀井六郎  
絵・松本 浦



の太陽』内田あかり『浮世絵の街』が登場、歌の魅力に加え歌姫たちのユニークな振り付けが相乗効果をもたらし、深夜にふさわしい、匂い立つような色気がブラウン管から伝わってきましたが、その伏線となったのは「変身」でした。

『歌のグラウンド・ショー』などへの出演でNHK御用達のイメージが強かった金井克子は、ダイナミックな網タイツダンスから変身、上半身のみの駅員点呼風の振り付けと無表情での妖しい視線は、番組の視聴率アップに大きく貢献したことでしょう。『絹の靴下』でブレイクする2年前、

夏木マリはフリフリ衣装を身にまとい本名の中島淳子でデビューするも失敗、アイドル路線からアダルト歌手への変身は見事でした。B面の『媚薬』とともに、題名は両面と



も作詞した阿久悠が20代前半に観たであろう米国製洋画作品のタイトルからの借用。おそらく変身のモデルとなったのは、イタリア女優のシルヴァーナ・マンガノとソフィア・ローレン、そして映画『媚薬』の主演キム・ノヴァクあたりをイメージした肉体派女優でしょう。

安西マリアの『涙の太陽』（東芝、編曲・川口真）はオリジナルがエミー・ジャクソンの英語詞ですが、新たな編曲と振り付けと日本語歌詞（オリジナルは青山ミチ）によって、外国曲のイメージを歌謡曲に一変させました。

奇抜な和装とターバン姿で登場した内田あかりにも驚きました。マヒナスターズと一緒に『私って駄目な女ね』（作詞・上岡龍太郎）を歌っていた大形久仁子が、名前も姿もイメージもすべて捨て去って変身していたからです。妖しげな歌麿の世界が「和風じゅうたんバー」のような雰囲気醸し出してました。

その年の8月、『赤い風船』の浅田美代子をイメージキャラにしていた百貨店の2次募集に合格、長かった私の就活も終わりました。